

エイジングとパーソナル・ネットワーク

—友人関係機能を中心に—

前 田 尚 子

Aging and Personal Network

Naoko Maeda

Summary

In this paper, the effect of aging on the function of friendships is explored. A theoretical framework of aging and friendship function is proposed. In addition, a cross-sectional survey data is preliminarily analyzed. Finally, hypotheses to be tested by longitudinal survey data hereafter are proposed.

key words : Aging; Personal Network; Friendship.

1. 問題設定

エイジング（＝老化）によるパーソナル・ネットワーク¹⁾の変化を捉えることは、社会老年学の主要な研究テーマの一つである。しかしながら、これまでのわが国の研究成果をふり返ると、このテーマについての実証研究の蓄積がすすんでいるとはいいがたい。その理由としては以下の2点が挙げられる。

第1には、独立変数であるエイジング自体が多数の要素の経過的变化を包む複合的な現象であるため、エイジングによるパーソナル・ネットワークの変化を捉えるには、エイジングを要素分解した理論枠組が必要である。しかし、いまだそのような理論枠組が整備されていないため、実証研究において加齢にともなうパーソナル・ネットワークの変化がみられても、そのような変化をもたらす真の要因を特定できない。第2には、エイジングによるパーソナル・ネットワークの変化を統計的に分析するには大規模な時系列的データが必要であるが、そのようなデータを収集するには非常に多くの費用と労力と年月を要する。

しかし、最近では、超高齢社会の到来を控え、高齢者研究のための基礎的データを蓄積する必要性が社会的に認知されるようになり、わが国でもようやく、中高年を対象とした大規模な時系列データの収集が始められている。それに伴い、エイジングによるパーソナル・ネットワークの変化を説明する理論的枠組の整備が喫緊の課題となっている。このような状

況をふまえ、本稿では、エイジングとパーソナル・ネットワークの変化を説明する理論枠組を検討する。すなわち、エイジングという複雑な現象を理論的に要素分解し、それがパーソナル・ネットワークにもたらす変化を分析する枠組を設定するのである。そして、その枠組に準拠して横断的データの探索的分析を行い、今後、時系列データによって検証されるべき仮説を提示することにしたい。

ところで、従属変数であるパーソナル・ネットワークは、家族、親族、友人、近隣、同僚などの関係カテゴリーによって構成されているが、本稿では友人関係を取りあげる。周知のように、これまでのエイジングとパーソナル・ネットワークの研究では、家族・親族関係を中心としてきた（前田1999a）。これに対し、本稿では、あえて友人関係に注目する。これは、家族・親族関係の重要性を認めないからではない。逆に、家族・親族関係は、近年そのゆらぎが指摘されているものの、それでもなお、制度的な拘束力、情緒的な結合力いずれをとってもきわめて高い関係であり、それゆえに、エイジングによる変化を比較的受けにくい。それに対し、友人関係は、パーソナル・ネットワークを構成する関係カテゴリーのなかでもっとも選択性が高い関係であり、それゆえに、エイジングによる変化があらわれやすいと考えるからである。

また、パーソナル・ネットワークの特性を捉える次元としては構造特性（規模、密度、多重性など）と機能特性があるが、本稿では、後者に焦点を絞ることにし、前者については別稿にゆずることにしたい。したがって、以下では、エイジングによる友人関係の機能の変化を中心として、議論をすすめていくことになる。

2. エイジングとはなにか

エイジングという複雑な現象は、これまでどのように概念化されてきたであろうか。わが国における社会老年学研究の第一人者である、副田義也と直井道子による定義を確認することからはじめよう。まず、直井によれば、エイジングは「『歳をとること』ならびにそれにもなって生じる変化」である。そして、この意味でのエイジングは、生まれてから死ぬまでのすべての『歳をとる』過程を表現するのに便利な言葉であるが、「主要な焦点は成人以後の過程にある」（直井2001）という。これにしたがえば、エイジングによるパーソナル・ネットワークの変化とは、おもに成人以後において、「歳をとること」ならびにそれにもなって生じる変化によるパーソナル・ネットワークの変化を意味する。

それでは、「歳をとること」ならびにそれに伴って生じる変化とは、いかなるものであろうか。この点については副田の見解が参考になる。副田は、「老年とは何か」という問いに対して以下のように答えているが、その内容は、「『歳をとること』ならびにそれに伴って生じる変化」の特質を端的に表現していると思われる。

副田は、老年夫妻の生活の詳細なケーススタディから、生活と意識において、さまざまな

要素が時間の経過につれて変化してきたことを見出し、老年とは、微視的には、過程的であり、多元的であると指摘した。すなわち、さまざまな要素が、時間の経過とともに、次第に出現するのである。さらに副田は、そのような要素を5つの群に区別している。Ⅰ群は暦年齢での高齢化にともなう心身の諸能力の衰退傾向、Ⅱ群は職業からの引退とこれに直接に起因する地位、役割、社会関係の諸変化、Ⅲ群は疾病の発生や欲望の衰退とこれが人間関係にもたらす影響、Ⅳ群は地域社会や親族ネットワークのなかで老人、祖父母として扱われること、Ⅴ群は老いつつあるもの、老いたものとしてのセルフ・イメージである（副田1981）。このうち、Ⅱ群、Ⅲ群にはパーソナル・ネットワーク自体の変化も含まれている。われわれの目的はエイジングがパーソナル・ネットワークに及ぼす影響の追求であるため、エイジングとパーソナル・ネットワークの変化を概念上切り離しておく必要がある。そのような視点から副田が提示した5つの要素を再構成するならば、Ⅰ群は心身の諸能力の衰退傾向、Ⅱ群は職業役割の喪失、Ⅲ群は疾病の発生や欲望の衰退、Ⅳ群は地域社会や親族ネットワークにおける役割の変化、Ⅴ群はセルフ・イメージの変化とまとめることができよう。

3. エイジングと友人関係の機能

これまでの議論をふまえると、エイジングとは、成人期以後において、暦年齢の高齢化とともに生じる過程的で多元的な変化である。それでは、エイジングはどのようなプロセスを経て友人関係の機能に影響をおよぼすのであろうか。以下では多元的および過程的というエイジングの特徴を押さえながら、エイジングと友人関係機能の関係を検討していこう。

3. 1 エイジングの特徴1：多元的

副田はエイジングの構成する多元的な要素として先に示したⅠからⅤ群を提示しているが、これらのうち、Ⅰ群・Ⅱ群・Ⅲ群は、従来の実証研究において、年齢による友人関係の差異を説明する要因としてしばしば言及されてきたものである。たとえば、野邊は、高齢女性のパーソナル・ネットワークの規模が年齢とともに縮小しているのは、加齢に伴う身体的能力低下の結果であると解釈している（野邊 1999）。副田によるⅠ群からⅤ群までの要因は、友人関係に対するニーズを規定するとともに、友人関係の選択にかかわる機会－制約条件を規定することを通じて、友人関係の機能に影響を及ぼすと考えられる²⁾。

3. 2 エイジングの特徴2：過程的

第2の「過程的」という特徴については、副田は、エイジングの諸要素は時間の経過とともに段階的に変化すると述べるにとどまっておらず、それがパーソナル・ネットワークの変化とどのようにかかわっているかまでは踏み込んでいない。これを補うものとして、エイジングが時間の経過を包含していることに着目した、カーンとアントヌッチによるコンボイ・モ

デルをとりあげよう。

カーンとアントヌッチのコンボイ・モデル

カーンとアントヌッチは、個人は一生を通じて、一群の人々と社会的支援を交換しながら人生航路を進んでいくと考えており、このようなライフコースを通じた動的な支援ネットワークをコンボイと名づけている (Kahn and Antonucci 1981)。コンボイ・モデルは、エイジングとパーソナル・ネットワークに関するもっとも包括的な理論枠組と評されているが、エイジングを構成する多元的な要素についてはやや羅列的に提示されているきらいがあり、その点については十分に体系化された枠組であるとはいえない。しかし、エイジングの「過程的」という特質が時間の経過を通じてパーソナル・ネットワークに影響を及ぼすと考えている点が注目される。

このモデルにおける時間の経過の位置づけが比較的具体的に示されているのは、アントヌッチとアキヤマの1987年の論文である (Antonucci and Akiyama 1987)。この論文では、横断的データを用いてモデルの予備的考察を行っており、エイジングがパーソナル・ネットワークの構造と機能におよぼす変化について、以下の仮説が検討されている。

- (1) 高齢になるほど、ネットワーク成員の死亡を多く経験するため、ネットワークの規模は小さくなる。
- (2) 高齢になるほど、ネットワーク成員との関係継続期間が長い。
- (3) 高齢になるほど、より多くの支援が必要になるため、同程度あるいはより少ないネットワーク成員から多くの支援を受ける。あるいは、より多くのネットワーク成員から支援を受ける。
- (4) 高齢になるほど、より多くの支援が必要になるため、男性よりも支援的である女性がネットワークに占める比率が高くなる。
- (5) 高齢になるほど地理的移動性が低下するため、ネットワーク成員が近くに居住し、頻繁に接触している。

これらの仮説に含まれているエイジングの構成要素を、副田のそれと比較してみると、(3)(4)(5)は、いずれも個人レベルでの心身の衰退に着目しており、副田のⅠ群・Ⅲ群に相当する要素である。それに対し、(1)(2)は、エイジングに含まれる時間の要素に着目している点、個人ではなく関係レベルの変化を取り上げている点がユニークである。さらに、アントヌッチらは、ともに生きてきた過去の時間の長さが関係におよぼす影響にも言及しており、時間の経過とともに特殊な経験を分かち合うなかで、関係の質が変化すると示唆している。

アントヌッチらは、エイジングと関係の継続期間についての上記の仮説を、アメリカ合衆国全国を代表する50歳以上のサンプルからなるデータによって検証している。年齢による横断分析の結果は、高齢者ほどパーソナル・ネットワークの成員と長期的に関わっていること

を示していた。しかし、長期的関与が関係の質にどのような影響を及ぼしているかという点まで踏み込んだ分析は行っていない。

アランの友人関係研究：時間の経過と友人関係の機能

コンボイ・モデルでは、時間の経過による関係の質的变化の可能性を示唆したものの、時間の経過が具体的にどのような変化をもたらすのかという点については理論的にも経験的にも踏み込んだ検討を行わなかった。この点を補うものとして、アランの友人関係研究をとりあげよう (Allan, 1989)。

アランは、高齢期の友人関係の特質として、関係が長期にわたっていることに注目する。そして、長期にわたる友人関係は、個人にとって特別な機能をもつと考える。彼によれば、長期にわたる友人関係は、時の試練に耐えてきたため、新しい友人関係には欠落している個人史を持っている。それゆえに、長期にわたる友人は、互いの経験を確認し、その個性の意義を認め合うことによって、高齢になっても意味と連続性を提供してくれる。つまり、長期にわたる友人関係はアイデンティティの感覚を提供するという、固有の機能をもつと考えているのである。

4. 分析枠組

さて、エイジングの多面的・経過的という特質とパーソナル・ネットワークの変化との関連についてのこれまでの議論を踏まえ、エイジングと友人関係の機能を捉える分析枠組を次のように設定することにしたい。

図1に示したように、暦年齢の高齢化は、いくつかの媒介変数を経て、友人関係の機能に影響を及ぼす。媒介変数の第1は、個人レベルの変化であり、これは身体的能力の変化、社会的役割の変化、心理的特性の変化に分類される。副田の老年概念から抽出したエイジングの構成要素のうち、I群に含まれていた身体的能力の衰退ならびにIII群の疾病の発生は、この枠組では「身体的能力の変化」に分類される。副田によるII群の職業役割の喪失とIV群の地域社会や親族ネットワークにおける役割変化は、この枠組では「社会的役割の変化」に分類される。副田によるV群のセルフ・イメージの変化、III群の欲望の衰退、そしてI群に含まれていた心理的能力の衰退は、この枠組みではそれぞれ「心理的特性の変化」に分類される。これらの個人レベルの変化は、友人関係に対するニーズと、友人関係の形成・維持にかかわる機会-制約条件の変化をもたらす、その結果として友人関係の機能に変化が生じる。

媒介変数の第2は、関係レベルでの変化である。これは、暦年齢の高齢化に含まれる時間の経過がもたらす友人関係の質的な変化である。友人関係は、時間の経過とともに性質を変化させていき、長期にわたる友人関係はアイデンティティの感覚を提供するというアランの仮説にもとづく媒介変数である。

媒介変数の第3は、エイジングによる家族・親族関係機能の変化である。家族・親族関係と友人関係には機能的連関があると考えられるため、エイジングが友人関係の機能に直接及ぼす効果のみならず、家族・親族関係の機能の変化を経由して間接的に及ぼす効果も考慮して分析を行う。

以下では、この枠組に基づいて横断的データを分析し、今後時系列データによって検証すべき仮説を提示することにしたい。

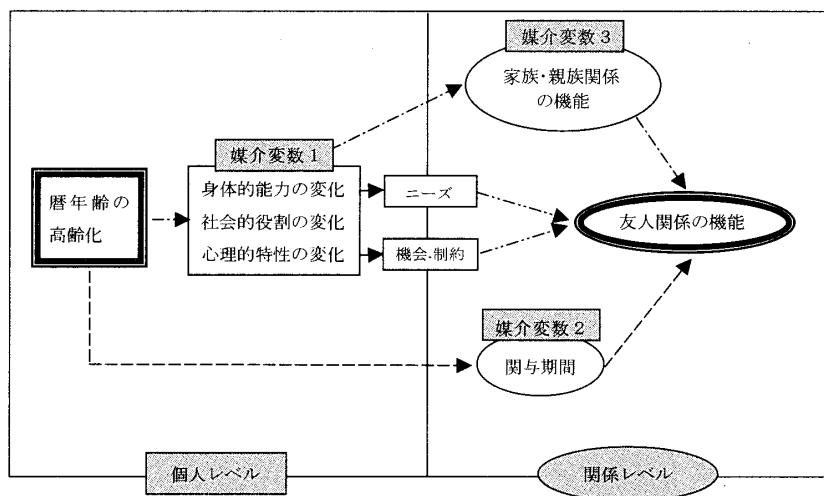


図1 分析枠組

5 データと変数

5.1 データ

2001年5月中に岐阜市在住の1931年から1960年生まれ（2000年12月31日現在で、40歳から69歳）の男女を対象に、2段無作為抽出法によって1500名を抽出した。同年8月中に郵送法による質問紙調査を実施し、614票の回答を得た（回収率は41%）³⁾。

614名の対象者の年齢（2000年12月31日現在の満年齢）は、平均値55.7歳で、40代25.6%、50代36.7%、60代37.7%である。性別は、男性41.4%、女性58.6%。回答者の88.0%が有配偶である。学歴は大卒19.2%、短大・高専卒12.8%、高卒47.0%、中卒21.0%と、高卒と中卒の比率が高い。世帯年収は、500万円未満40.5%、500万円以上900万円未満が30.5%、900万円以上が28.9%である。職業は、専門・管理・技術20.0%、販売・事務25.1%、生産・現業5.9%、事業主14.4%、無職29.5%である。

5.2 変数

5.2.1 年齢と友人関係の機能を媒介する変数

媒介変数1：個人レベルのエイジングの要素として、身体的能力と社会的役割をとりあげた。身体的能力の指標は健康状態、社会的役割の指標は、職業役割に関する2変数（職業の有無、職業にかかわるストレスの有無）と家族役割に関する2変数（子どもに関するストレスの有無、配偶者の有無）である。

媒介変数2：友人関係の関与期間の指標は、友人との交際期間である。調査対象者に、家族・親族以外の友人のなかから、1番目と2番目に親しい友人を挙げてもらい、それぞれの友人と知り合ってから年数をたずね、その回答を実数のまま用いる。

媒介変数3：家族・親族関係の機能の指標としては、別居している子どもからのサポートをとりあげた。上述の2人の親しい友人に関する質問に続いて、調査対象者に、以下の6つのサポート項目を提示し、「あなたは、つぎのような場合、同居のご家族以外でおもにどなたに頼んだり相談したりなさいますか。想定でも結構です」と訊ねた。サポート項目は、実用的サポートとして「引越しや冠婚葬祭など人手が必要なときに手伝いを頼む」と「家族が入院したときに買い物や送迎などの手伝いを頼む」、情動的サポートとして「医療や福祉について知りたいときに相談する」と「あなたや家族の就職あるいは転職について相談する」、情緒的サポートとして「個人的な悩み事を相談する」と「気楽におしゃべりや気晴らしをする」を採用した。そして、「別居している親」「別居している子ども」「それ以外の親族」「友人」「仕事関係の人」「近所の人」「専門的なサービス」「いない」の8つの選択肢を示し、あてはまるものを全て選んでもらった。そして、6つのサポート項目について、回答者が「別居している子ども」を選択した項目数を合計し、別居子からのサポート得点とした。この得点が高いほど、回答者は多くの種類のサポートを別居子から入手できると考えていることを示す。

5. 2. 2 友人関係機能の変数

従属変数である友人関係の機能を測定するために、調査対象者があげた、1番目と2番目に親しい友人関係のそれぞれについて「この友人関係を一言で言い表すとどのような関係ですか」と訊ね、「気楽なおしゃべりを楽しむ関係」「趣味や娯楽を一緒に楽しむ関係」「心配事や悩みを聞きあう関係」「助言やアドバイスをしあう関係」「仕事や生活などの実用的な面で助け合う関係」「互いに能力や努力を認め合う関係」「互いに精神的に支えあう関係」という7つの選択肢のなかから、あてはまるもの全てを選んでもらった。そして、7つの選択肢それぞれについてあてはまるかどうかというダミー変数を設定した。

5. 2. 3 統制変数：コーホート変数

そのほかに、横断的データの分析であることを考慮して、コーホート効果をとらえるための指標として教育年数（実数）と家族意識を統制変数として採用した⁴⁾。現在の中老年は、出生コーホートによって家族意識と学歴に少なからぬ差異があり、それが友人関係に影響を及

ばしている可能性があると考えたからである。

5. 3 分析手順

加齢はどのような媒介変数を通じて友人関係の機能に影響を及ぼしているかを探索するために、図2に示した順序で分析を行う。第1に、年齢と友人関係機能の単純相関分析を行い、年齢によって差がみられる友人関係の機能を特定する。第2に、年齢と媒介変数・コーホート変数の単純相関分析を行い、年齢によって差がみられる媒介変数・コーホート変数を特定する。第3に、第2の分析において年齢と有意な相関関係があった媒介変数・コーホート変数と、第1の分析において年齢と有意な相関関係にあった友人関係機能との単純相関分析を行う。さらに、第3の分析において友人機能と有意な相関があった媒介変数・コーホート変数を独立変数とし、各友人関係機能の有無を従属変数とするロジスティック回帰分析を行う。以上の分析を通じて、年齢の違いが、媒介変数を通じて、友人関係の機能の差異を生み出すプロセスを探索する。なお、友人関係の機能には性差があることが先行研究から明らかとなっているため (Booth 1972, Powers and Bultena 1976)、これらの分析はすべて男女別に行う⁵⁾。

分析には、回答者個人のデータ・ファイル (N=614。以下では個人単位データ・ファイルと呼ぶ。) と、回答者が挙げた2人の親しい友人との関係を単位とするデータ・ファイル (N=1157。以下では関係単位データ・ファイルと呼ぶ) の2つのファイルを用いる。

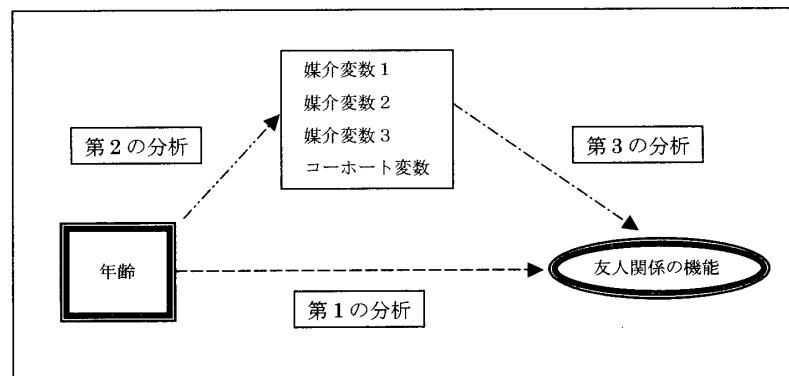


図2 分析の手順

6. 結果

6. 1 年齢と友人関係の機能 (第1の分析)

関係データ・ファイルを用いて、年齢と友人関係機能との単純相関分析をおこなった結果は表1にまとめられている。年齢と友人関係の機能の関連は男女でまったく異なっている。男性では、「おしゃべりを楽しむ」と「精神的に支えあう」が年齢と有意な正の相関関係にあり、年齢が高くと、「おしゃべりを楽しむ」と「精神的に支えあう」が増える。女性では、

「心配事や悩みを聞きあう」と「助言やアドバイスをしあう」が年齢と負の相関関係にあり、年齢が高いと、「心配事や悩みを聞きあう」と「助言やアドバイスをしあう」が低下する。これらの年齢による差は、いくつかの媒介変数を経た複合的な帰結として生じていると考えられる。さらに、横断的分析であるため、コーホート差が含まれている可能性もある。以下では、このような年齢の効果を生み出すプロセスを探索していくことにしよう。

表1 年齢と友人関係機能の単純相関分析結果

友人関係の機能	男性		女性	
	相関係数	N	相関係数	N
気楽なおしゃべりを楽しむ関係	0.092*	467	-0.061	690
趣味や娯楽と一緒に楽しむ関係	0.015	467	0.040	690
心配事や悩みを聞きあう関係	-0.060	467	-0.184**	690
助言やアドバイスをしあう関係	-0.045	467	-0.149**	690
仕事や生活など実用的な面で助け合う関係	-0.021	467	-0.056	690
互いに能力や努力を認め合う関係	-0.029	467	-0.036	690
互いに精神的に支えあう関係	0.115**	467	-0.001	690

** : p<0.01 * : p<0.05

※すべて関係単位データ・ファイルを使用。

6. 2 年齢と媒介変数・コーホート変数（第2の分析）

年齢が友人関係の機能に影響を及ぼすプロセスを分析するためにまず、年齢と媒介変数およびコーホート変数の単純相関を分析する。その結果は、表2にまとめられている。以下では、変数ごとに詳しくみていくことにしよう。

6. 2. 1 年齢と媒介変数1：身体的能力・社会的役割

はじめに、年齢と身体的能力・社会的役割との単純相関関係分析の結果をみると、身体的能力の指標である健康状態については、回答者の年齢が比較的若いためか、有意な相関はなかった。社会的役割については、職業役割に関する指標である職業の有無および職業にかかわるストレスの有無をみると、いずれも、男女とも、年齢と負の相関関係があり、年齢が高いと、有職のものおよび職業にかかわるストレスのあるものが少なくなっている。家族役割についての指標をみると、子どもに関するストレスの有無は、女性のみ年齢との負の相関があり、年齢が高いと子どもに関するストレスのあるものが少なくなる。配偶者の有無も同様に、女性のみ年齢と負の相関があり、年齢が高いと有配偶者が少なくなる。全体として、年齢に伴う社会的役割の変化は、女性の方が顕著である。

表2 年齢と媒介変数・コーホート変数の単純相関分析結果

媒介変数・コーホート変数	男性		女性	
	相関係数	N	相関係数	N
媒介変数1				
健康状態（良い→悪い）	0.035	253	0.052	356
職業の有無（無職→有職）	-0.415**	248	-0.324**	346
仕事ストレス（なし→あり）	-0.420**	241	-0.239**	347
子どもに関するストレス（なし→あり）	-0.081	241	-0.288**	347
配偶者の有無（なし→あり）	0.008	253	-0.236**	355
媒介変数2				
交際年数（短い→長い）	0.359**	467	0.370**	688
媒介変数3				
別居子からのサポート（少ない→多い）	0.519**	211	0.511**	283
コーホート変数				
伝統的家族意識（弱い→強い）	0.007	250	0.213**	352
教育年数（短い→長い）	-0.387**	250	-0.330**	350

** : p<0.01 * : p<0.05

※交際年数を含む分析のみ関係単位データ・ファイルを使用。それ以外はすべて個人単位データ・ファイルを使用。

6. 2. 2 年齢と媒介変数2：友人関係の関与期間

年齢と友人関係の関与期間の単純相関分析を行ったところ、男女とも正の相関関係があり、年齢が高いと友人関係の関与期間が長くなっていた。

6. 2. 3 年齢と媒介変数3：家族・親族関係機能

年齢と別居子からのサポートの単純相関関係を分析したところ、男女ともに正の相関関係があり、年齢が高いと別居子から多くのサポートを得ていた。

6. 2. 4 年齢とコーホート変数

最後に、コーホート変数である伝統的家族意識および教育年数と年齢との単純相関分析を行った。伝統的家族意識については、女性のみ正の相関があらわれ、年齢が高いと伝統的家族意識が強いことが明らかとなった。教育年数については、男女ともに年齢と有意な負の相関があり、年齢が高いと教育年数が短くなっている。

6. 3 媒介変数・コーホート変数と友人関係機能（第3の分析）

つづいて、6.1の分析において年齢と有意な関連があった友人関係機能と、6.2の分析において年齢と有意な関連があった媒介変数・コーホート変数を取りあげ、媒介変数・コーホート変数と友人関係機能との単純相関分析を行った。結果は表3（男性）と表4（女性）にまとめられている。以下では、男女別に詳しくみていくことにしよう。

男性

さきにもたように、男性の場合、年齢と有意な相関があった友人関係機能は、「おしゃべりを楽しむ」と「精神的に支えあう」であった（表1）。「おしゃべりを楽しむ」については、年齢と有意な相関のあった媒介変数・コーホート変数のうち、交際年数と教育年数とに有意な相関がみられた（表3）。交際年数が長いほど、そして教育年数が短いほど、友人関係は「おしゃべりを楽しむ」という機能を果たしている。つまり、男性の場合、年齢が高いほど、友人との交際期間が長く、教育年数が短く、その結果として、友人関係において「おしゃべりを楽しむ」という機能が多くあらわれているのである。これら2つの変数を独立変数とし、友人関係における「おしゃべりを楽しむ」の有無を従属変数として、ロジスティック回帰分析を行った結果は表5左欄のようである⁶⁾。コーホート変数である教育年数を統制しても、友人との交際年数の効果は危険率5%で有意であった⁷⁾。

つぎに、「精神的に支えあう」については、職業の有無、仕事ストレスの有無、交際年数、教育年数と相関していた（表3）。無職のもの、仕事ストレスのないもの、交際年数の長いもの、教育年数の短いものの友人関係は、そうでないものよりも、「精神的に支えあう」という機能を果たしている。年齢との関連をたどれば、年齢が高いと、無職のものが多く、仕事ストレスのないものが多く、友人との交際年数が長く、教育期間が短く、その結果として、友人関係が「精神的に支えあう」という機能を果たすようになるのである。このうち、仕事ストレスの有無、交際年数および教育年数を独立変数とし、友人関係における「精神的に支えあう」の有無を従属変数として、ロジスティック回帰分析を行ったところ⁸⁾、表5中欄のように交際年数と仕事ストレスの有無は、それぞれ危険率1%水準と5%水準で有意な効果を示していた⁹⁾。

女性

女性の場合、年齢と有意な相関があった友人関係機能は、「心配事や悩みを聞きあう」と「助言やアドバイスをしあう」であった（表1）。年齢と相関している媒介変数・コーホート変数のうち、「心配事や悩みを聞きあう」と有意な相関があったのは伝統的家族意識と教育年数であるが、これらはいずれもコーホート変数である（表4）。すなわち、どの媒介変数も「心配事や悩みを聞きあう」に有意な規定力をもっていなかったのである。

「助言やアドバイスをしあう」については、職業の有無、子どもに関するストレスの有無、教育年数とのあいだに有意な相関があった(表4)。有職のもの、子どもに関するストレスのあるもの、教育年数の長いものの友人関係は、そうでないものよりも、「助言やアドバイスをしあう」という機能を果たしている。年齢との関連をたどれば、年齢が高いと、有職のものが少なく、子どもに関するストレスのあるものが少なく、教育期間が短く、その結果として、友人関係が「助言やアドバイスをしあう」という機能を果たさなくなるのである。これらの3変数を独立変数とし、友人関係における「助言やアドバイスをしあう」の有無を従属変数として、ロジスティック回帰分析を行った結果は表5右欄のようである¹⁰⁾。コーホート変数である教育変数を統制してもなお、子どもに関するストレスの有無と職業の有無の効果は、それぞれ危険率5%水準で有意であった。子どもに関するストレスがあると、そして職業をもっていると、友人関係において「助言やアドバイスをしあう」がより多くなっている¹¹⁾。

表3 媒介変数・コーホート変数と友人関係機能の単純相関分析結果(男性)

媒介変数・コーホート変数	友人関係の機能		友人関係の機能	
	気楽なおしゃべりを楽しむ	N	互いに精神的に支え合う	N
媒介変数1				
職業の有無(無職→有職)	0.004	258	-0.136**	458
仕事ストレス(なし→あり)	0.045	464	-0.144**	464
媒介変数2				
交際年数(短い→長い)	0.104*	260	0.175**	460
媒介変数3				
別居子からのサポート(少ない→多い)	0.072	404	0.062	404
コーホート変数				
教育年数(短い→長い)	-0.132**	461	-0.092*	461

** : p<0.01 * : p<0.05

※関係単位データ・ファイルを使用。

表4 媒介変数・コーホート変数と友人関係機能の単純相関分析結果（女性）

媒介変数・コーホート変数	友人関係の機能		助言やアドバイスをしあう	
	心配事や悩みを聞きあう	N	相関係数	N
媒介変数1				
職業の有無（無職→有職）	0.057	662	0.079*	662
仕事ストレス（なし→あり）	0.050	679	0.050	679
子どもストレス（なし→あり）	0.067	679	0.105**	679
配偶者の有無（なし→あり）	0.005	680	-0.011	680
媒介変数2				
交際年数（短い→長い）	0.050	681	-0.043	681
媒介変数3				
別居子からのサポート（少ない→多い）	-0.069	554	-0.083	554
コーホート変数				
伝統的家族意識（弱い→強い）	-0.110**	676	-0.067	676
教育年数（短い→長い）	0.087*	670	0.126**	670

**：p<0.01 *：p<0.05

※すべて関係単位データ・ファイルを使用。

表5 ロジスティック回帰分析の結果（数値は回帰係数）

独立変数	従属変数	男性		女性
		おしゃべりを楽しむ	精神的に支えあう	助言やアドバイスをしあう
職業の有無（無職→有職）	—	—	—	-0.335*
仕事ストレス（なし→あり）	—	—	-0.592*	—
子どもストレス（なし→あり）	—	—	—	0.352*
交際期間（短い→長い）	0.015*	—	0.029**	—
教育年数（短い→長い）	-0.099*	—	-0.034	0.117**
定数	0.692	—	-1.424*	-1.408
モデルのカイ自乗値	13.468**	—	21.222**	18.383**
自由度	2	—	3	3

**：p<0.01 *：p<0.05

※すべて関係単位データ・ファイルを使用。

7. 考察

これまでの分析結果をまとめよう。

1. エイジングによる友人関係機能の変化のパターンは、男女で著しく異なっている。
2. 男性の場合、年齢差がみられた友人関係の機能は、「おしゃべりを楽しむ」と「精神的に支えあう」であり、どちらも高齢層ほど多くなっていた。これらの機能の年齢差を生み出すプロセスを探索した結果、「おしゃべりを楽しむ」については、加齢にともなう友人との交際年数の長期化が媒介要因となっていた。また、「精神的に支えあう」についても同様に、加齢にともなう交際年数の長期化が媒介要因となっていた。そのほかに、「精神的に支えあう」では、仕事ストレスの減少も媒介要因となっていた。加齢とともに仕事へのコミットメントが弱まるとともに、友人との精神的なつながりが重視されていくと考えられる。
3. 女性の場合は、年齢差があった機能は、「心配事や悩みを聞きあう」と「助言やアドバイスをしあう」のみであり、高齢層ほどこれらの機能は低下していた。これらの年齢差を生み出すプロセスを探ったところ、エイジングの効果がみられたのは、「助言やアドバイスをしあう」のみであった。高齢になると、母親役割から解放されて子どもに関するストレスが少なくなり、また、職業役割からも解放されて仕事に関する相談ごとがなくなり、その結果、友人関係における相談機能は低下するのである。
4. 男女ともに、年齢とともに別居子から多くのサポートを受けるようになるが、それは友人関係の機能には影響を及ぼしていなかった。

以上より、エイジングによる友人機能の変化のパターンとメカニズムには、性差があることが示唆された。男性はエイジングにより友人関係の機能を付け加えていくが、女性は機能を縮小していく。そのような変化をもたらす主要因は、男性の場合には交際期間の長期化であったのに対し、女性の場合には社会的役割からの解放にともなうニーズの低下であった。具体的には、男性の場合、年齢を重ねて、友人との交際期間が長期化するとともに、「おしゃべりを楽しむ」と「精神的に支えあう」の機能があらたに付け加えられていく。そのほかに、仕事へのコミットメントの弱まりによっても、「精神的に支えあう」という機能が加えられていく。それに対し、女性の場合、エイジングは、もっぱら社会的役割からの解放によるニーズの低下を媒介として、友人関係の機能を縮小していく。具体的には、母親役割からの解放、職業役割からの解放によるニーズの低下により、友人関係の「助言やアドバイスをしあう」機能は潜在化していくのである。

以上の性差は、男女の友人関係の意味づけの違いによって、少なくとも部分的には説明可能である。先行研究では、親しい友人の意味づけには、生得的あるいは文化的な要因に基づく性差があると指摘されている (Vaux 1985)。それにもとづけば、女性は自己開示性が高く、表出的であるため、友人は情緒的に依存する相手である。ゆえに女性は、ライフステージとともに変化するさまざまな生活問題について友人に相談をもちかける。高齢期に向かって家

族や仕事にかかわる生活問題が少なくなってくれば、それらについての相談を友人に求めることはなくなる。つまり、エイジングにともなう生活ストレスの減少が、そのまま友人関係の機能に反映されるのである。

それに対し、男性は生得的あるいは文化的要因により、自己開示に対して抑制的である。ゆえに、友人は情緒的に依存しあう相手ではなく、手段的に協力し合ったり、趣味やスポーツをともに楽しんだりする相手である。したがって、こまごまとした生活問題の相談を友人にもちかけることはあまりない。ゆえに、高齢期に向かって主たる役割から解放され、生活ストレスが低下しても、それとともに相談機能が大きく低下することはない。むしろ、年齢を重ね、友人との交際期間が長くなっていくとともに、友人間で自己開示がなされるようになり、親しい友人が「精神的な支え」や「おしゃべりを楽しむ」といった情緒的機能を果たすようになっていくと考えられる。さらに、仕事へのコミットメントの低下もまた、友人関係の情緒的機能へのシフトを促進すると考えられる。

生得的あるいは文化的要因にもとづく親しい友人関係の意味づけの性差は、エイジングが友人関係機能に及ぼす効果において、以上のようなパターンとメカニズムの性差をもたらしていると考えられる。ただし、これらの知見は横断的なデータに基づく予備的な分析にもとづくものであり、今後はここで提示された仮説を時系列データによって検証していくことが必要である¹²⁾。

注

- 1) 社会的ネットワークのうち、個人を中心としたネットワークは **personal network** あるいは **ego-centric network** と呼ばれる。
- 2) ネットワーク選択の機会-制約条件については、前田1999bに示した「機会-制約モデル」を参照されたい。
- 3) 郵送調査であるため、欠損値を多く含んでおり、個々の分析に利用可能な有効票数はさらに少なくなる。
- 4) 家族意識の指標として、「親の面倒をみるのは長男の義務である」という意見について同意するかどうかをたずね、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法で回答をもとめ、同意するものほど、伝統的な家族意識を持っているとした。
- 5) 以上の相関分析では年齢と他の変数の間の線形関係を前提としているが、それと並行して、年齢を5歳刻みのカテゴリカルな変数として他の変数との分散分析を行い、非線形の関連がないのかも確認している。
- 6) 独立変数である交際年数と教育年数の相関係数は-0.129 (P<0.01)。
- 7) ちなみに、この回帰分析に年齢を独立変数として加えると、年齢の効果はその他の変数

の効果に吸収されるが、交際年数の効果は危険率10%水準で残る。ただし、独立変数間（年齢と教育年数・交際年数）に強い相関があり、多重共線性の問題をはらんでいるため、この分析結果はあくまで参考資料にとどまる。

- 8) 職業の有無と仕事ストレスの有無のあいだには強い相関があるため（相関係数は0.424 $P<0.01$ ）、多重共線性の発生を懸念して、仕事ストレスのみを独立変数に加えた。その他の独立変数間の相関係数は以下のものである。仕事ストレスの有無と交際年数： -0.243 ($P<0.05$)、仕事ストレスと教育年数： 0.243 ($P<0.01$)、交際年数と教育年数： -0.129 ($P<0.01$)。
- 9) ちなみに、この回帰分析に年齢を独立変数として加えると、年齢の効果はその他の変数の効果に吸収されるが、交際年数と仕事ストレスの効果は、それぞれ危険率1%水準と5%水準で残る。ただし、独立変数間（年齢と教育年数・交際年数・仕事ストレス）に強い相関があり、多重共線性の問題をはらんでいるため、この分析結果はあくまで参考資料にとどまる。
- 10) 独立変数間の相関係数は以下のものである。職業の有無と子どもに関するストレスの有無： -0.042 (n.s.)、職業の有無と教育年数： 0.092 ($P<0.05$)、子どもに関するストレスの有無と教育年数： -0.123 ($P<0.05$)。
- 11) ちなみに、この回帰分析に年齢を独立変数として加えると、年齢の効果はその他の変数の効果に吸収される。職業の有無の効果も低下し有意でなくなる（回帰係数は -0.246 $p<0.02$) が、子どもに関するストレスの効果は危険率5%水準で残る。ただし、独立変数間（年齢と教育年数・子どもに関するストレスの有無・仕事の有無）に強い相関があり、多重共線性の問題をはらんでいるため、この分析結果はあくまで参考資料にとどまる。
- 12) 本稿で使用したデータでは、心理的変数を含んでいないため、エイジングにとまなう心理的要因の変化と友人関係機能の関連を検討することができなかった。心理的変数の導入も今後の課題である。

文 献

- Allan, Graham, 1989, *Friendship: Development a Sociological Perspective*, Harvester Wheatsheaf
- Antonucci, C., Toni and Hiroko.Akiyama.1987, "Social Networks in Adult Life and a Preliminary Examination of the Convoy Model," *Journal of Gerontology*, 42(5): 519-527.
- Booth, Allan,1972, "Sex and Social Participation," *American Sociological Review*, 37: 183-192.
- Kahn, Robert, L. and Toni, C., Antonucci,1981, "Convoys of Social Support: A Life-Course Approach," Kiesler, S. et al. eds. *Aging: Social Change*, Academic Press:383-405.
- 前田尚子、1999a「非親族からのソーシャル・サポート」折茂肇編集代表『新老年学』東京大学出版会：1405-1415。
- 前田尚子、1999b「大都市インナーエリア高齢者の世代間関係」日本家族社会学会『家族社会

学研究』第11号：82-94。

直井道子、2001『幸福に老いるために』剋草書房。

野辺政雄、1999、「高齢者のパーソナル・ネットワークとソーシャル・サポートの性別による違いについて」『社会学評論』50(3)：99-115.

Powers, Edward, A. and Gordon, L., Bultena, 1976, "Sex Difference in Intimate Friendships of Old Age," *Journal of Marriage and the Family*, 38 : 739-747.

副田義也 §1981「老年社会学の課題と方法」副田義也編『老年社会学Ⅰ 老年世代論』垣内出版：1-101。

Vaux, Alan, 1985, "Variations in Social Support Associated with Gender, Ethnicity, and Age," *Journal of Social Issues*, 41(1):89-110.

本研究は、平成13年度岐阜聖徳学園大学短期大学部特別研究助成金および平成13年度文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（C）(2)）による研究成果の一部である。